
勇者と魔王の国作り

ムトナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者と魔王の国作り

【Nコード】

N3522P

【作者名】

ムトナ

【あらすじ】

世界は魔王による危機に瀕していた――

しかしそれは志半ばに一人の若者によって阻まれた。

戦勝ムードが満ちる世界に、魔王を退けた勇者から一報が入る

「今日から、魔王と一緒に新しい国を作りまーす」

さあ世界はどうなる！？

プロローグ「魔王城、玉座の間にて――」(前書き)

一話あたりが大分短いです。あしからず

プロローグ「魔王城、玉座の間にて――」

その時、世界は危機に瀕していました。

一人の、魔族という軍勢を統べる者――すなわち、『魔王』の存在によって世界は確実に、それも急速に飲み込まれていったのです。そして、それを憂えた三つの国の王様たちは同盟を組み、共に魔王軍へ立ち向かいました。

だけれども、それでも魔王軍の勢いを止めることは出来なかったのです。

数多の兵士たちが、戦いに挑み敗れていきました。

幾多の街が、魔王の軍勢に飲み込まれていきました。

何人もの勇気ある者が、魔王の元にたどり着くも敗れました。

そんな中、一人の長命族の若者が、魔王を討つために旅に出ました。

ある人は、その若者を見て哂いました。長命族はその名の通り長い寿命を持ち頭もいいですが、直接的な戦闘では他の種族に大きく劣るからです。

またある人は、その若者を必死に止めました。その若者は、同盟を組んだ三国のうちの一国の宰相の唯一の子供だったからです。

それでも若者は周囲の反応をもとめせず、魔王の城へと乗り込み、いくつものトラップを掻い潜り、多くの魔王の部下を打ち倒し、ついには魔王の元へと辿り着きました。

そこは、闇よりなお暗き闇が支配する空間だった。

「ふっ、よくぞここまで来たな力持ちし者よ」

しかし、その暗き闇にもかかわらず二つの人影が、そこにはあった。

「キミが……魔王かい？」

フルブレストメイル

一人は純白の全身甲冑を身に纏い、同じく純白の長剣を携えた長命族特有の小柄な体躯の若者。

魔術で加工されているその純白の鎧は、空間すべてを支配する闇の中で装着者の存在を明らかにしている。

「その通り、俺が軍勢を統べる者——アリオスだ」

もう一人は空間に満ちる闇そのものを作り出す、一見すると20代半ばにしか見えない長身痩躯の青年。

しかし自らの名乗りの通り、彼は軍勢を統べる王——『魔王アリオス』だ。

「これは今まで俺の元に来たやつ等全員に聞いているのだが、お前は俺を倒して何を望む？ 富か？ 名声か？ 栄光か？」

ふと、魔王が世間話でもするかのように悪意に満ちた笑みで尋ねた。二人の間には、共に命を狙う者同士の緊張が走っているにもかかわらずに、だ。

「少なくとも、そのどれでもないよ。ちなみに参考までに、これまでの人はなんて言ったの？」

一方の若者も魔王の隙を窺いつつも、魔王に質問を返す。

「そうだな、大方のヤツは俺の居ない平和な世界。だとよ」

今度の笑みは嘲笑。まったくもってくだらないと鼻で笑う。

「俺が暴れまわる前からいがみ合っていた国のヤツ等が、揃いも揃って平和な世界だと」

「まったくだね。だからボクはキミの元へやってきたんだ」

「ほう？」

今までにない反応を示す相手を物珍しそうにねめつける。

「魔王アリオス……ボクはキミが欲しい」

「なんだ、俺の力を使って世界を取る気か？　ははっ！　まったくもって面白い！！」

若者の思わぬ台詞に、アリオスは本当に楽しそうに笑う。

「あー、ちょっと惜しいかな？　流石に世界は大きすぎるよ。ボクが君の力で欲しいモノはもう少しだけ小さいよ」

「もう少し小さい？」

自分の予想とは少し違う……そんな中途半端なことを言われ、好奇心が刺激され思わず鸚鵡返しに聞き返すアリオス。

「あは、興味を引いたかな？　ボクに負けたら、ソレが何か教えてあげるよ」

「はっ、随分大口を叩いたな。それなら、お前を倒して無理にでも聞き出してやるさ！」

それが二人の戦いの幕開けの合図だった。

「来い……若造お！！」

「ボクの願い、聞いてもらうよ！　魔王ッ」

魔王の身体の周囲から湧き出る漆黒の煙が、意志と形を持って若者に向けて襲い掛かるが、その尽くを若者は剣と魔法の防壁で防ぎ、また身体能力を駆使して避ける。

闇黒の空間と考えるそこは、魔王が座す玉座の間。

その中を縦横無尽に奔る漆黒の矢と純白の軌跡。

漆黒の矢は若者の接近を拒もうとするが、若者の全身を覆う鎧は打ち漏らした矢を阻む。

その鎧は若者が魔王の居城へ向かう道中で三国同盟の内の一国へ立ち寄った際、若者の父が各国に送った手配書のせいで身柄を拘束されたことがあったのだが、拘束を振り切って脱出する時に腹いせにかっぱらってきた三国が共同開発した最新式の対魔王装備の試作品である。

そして若者はそれを泉に住む精霊と妖精の鍛冶屋と自身の長命族の頭脳を合わせて完成させ、魔王の持つ魔力に反応して物理、魔力に対してそれぞれ五重障壁を展開し阻み、更にその手で振るう闇を

切り裂く剣は妖精の鍛冶屋が鍛えた特別製の破魔剣——正直かなり卑怯な武器である。

また、身体能力では多種族に劣る長命族であるはずの若者がここまでの挙動を可能にしているのは、ひとえに『クロックアップ・ブーースト』と呼ばれる遙か過去に禁術として封じられた魔術である。その効果は使用者の『時間』を消費することによって超常の力を与えるものである。もともと、捧げる『時間』は絶対的な数値であり、平気で千年以上生きる長命族の若者にとって今回捧げた六十年は正直大した時間ではない——まあ、人道的な問題と今のよう長命族がローリスクでチート級の術が使えるという理由で禁術になったのだと若者は考えるのだが、今はそんなことはどうでもいい。むしろ自分に都合が良かったのでバンバン使っている。

「悪いけど、君の魔法は効かないよ」

「ちい、厄介な！」

魔王の圧倒的な手数と、若者の絶対的な防御。

普段ならその圧倒的な魔力に任せた弾幕により、相手を一方的に打ち据える魔王の戦法も純白の鎧と破魔の剣によって全て阻まれている。

そして戦局は次第に若者の方へ傾いていく。

最初は二十歩近くあった若者と魔王との距離は、今や剣を振るうだけで相手へと届くだけとなっている。

「もらった——！！」

「こお……のおお！！」

二人の声が重なった時、勝負に決着がついた。

幾度となく漆黒の矢の直撃を受けた障壁は遂に崩壊し、魔王の渾身の右の貫手は若者の頭を貫かんと突き出されるも、首を傾けて紙一重で避ける。

一方の若者の剣は魔王の首の皮一枚に突きつけられている。

「これで、ボクの勝ち……だよ」

矢嵐の中を突っ切るという無茶な戦法は若者の精神を大きくすり

減らし、息も絶え絶えとなっている。

「……で、お前は俺の力で何をしたいんだ？言ってみろ」

一方、喉元に剣を突きつけられているのにもかかわらず、涼しい顔でいまだ尊大に尋ねる魔王。

いきなりそんなことを言われた若者は一瞬何のことかと考えたが、すぐに自分が先ほど言った「自分が勝ったら教える」という台詞に対する言葉だと悟った。

そう、それはつまり魔王は自らの敗北を認めたということだ。

しかし——なんともひねくれた言い方に思わず笑いが漏れる。

その時ふと、頬に触れる硬い感触。どうやら魔王が突き出した右手の突きの衝撃で兜が歪んで当たったようだ。

「そうだね……それじゃあボクは——」

魔王の喉元から剣を引き、もう必要のない兜を脱ぐ。目に掛かる髪を払いながら首を振り、兜の中に押し込んだ金髪の腰まで届く長髪を解放する。

「国を作りたい。キミは民を治め、ボクは国を治める——どう？
楽しそうでしょ」

「お前……」

ひどく楽しそうに語る若者の顔を見て魔王は——

「お前、女だったのか」

酷く驚いた。

「ボクの何処が男にみえるってえ!？」

そして次の瞬間若者の怒気を盛大に含んだ剣の一撃が魔王に振り降ろされる。が、魔王が白刃取りの要領で鼻先数センチでかろうじて止めている。

「ちよ……、バカッ、やめろ！流石にこんな間抜けなことで死にたくねーぞ!？」

いかに魔王とはいえど、無防備なところを斬られたのではひとたまりも無いので死ぬ気で剣を押しとどめる。

魔王があんまりにも哀れなので魔王をフォローするのならば、全

身鎧を着た挙句一人称が「ボク」では誤解も仕方ないと思われる。
が、乙女心にはそんなもの通じるわけも無く、ブーストのかかった
腕力に物を言わせて剣に力を込める。

「て、めえ。いいかげんに……しろお!!」

いつまで経つての力を緩めず、これは本気で殺る気でだと肌で感
じ取って「こいつぁ、ヤベェ」と思い、強制的に離れてもらうこと
にする。

まず剣を押しとどめている力のベクトルを上へとずらし、そして
腰を落とし重心を後ろへと持っていく。剣に単純に力を入れていた
だけの若者の身体は、それだけで簡単に魔王の思惑通りに前につん
のめる様に崩れる。その崩れる勢いのまま魔王は右足を鎧に覆われ
た腹に当てて一気に自分の身体を後ろに倒し、剣を押さえている腕
を支点に勢いのまま蹴り飛ばす。

変則的ではあるが、つまりは巴投げである。

勇者を巴投げする魔王なんて絵面、この世のどこに存在するんだ
と諸方面から突っ込みが入りそうだが、魔王本人にとっては文字通
り命がけなのでそんなことは知ったこっちゃ無い。

「ぎゅえ」

単純に斬りかかる事だけを考えていたからこそ、きれいに蹴り飛
ばされた若者は落ちた衝撃で女子にあるまじき不気味なうめき声を
上げる。

「あー、ったく。落ち着いたか？」

「落ち着いたというか、地面に落とされた」

「？」

本人的には落ち着くと落下したのを掛けたらしいが、魔王にはハ
イブローすぎて伝わらなかった。というか、上手くもなんとも無い。

「んで、お前は何をするつもりなんだ」

「とりあえず、ボクの乙女心を傷つけたキミに、しかるべき制裁
の10倍の制裁を与えようかと思う」

「そのことじゃねえよ!その話はもうやめろよ。つか、何だその

不穏当な倍率、それは制裁じゃなくてもはや報復だよなあ！？」

「じゃあ、何だって言うんだ」

魔王の必死な突っ込みに滅茶苦茶不満気に尋ね返す。

「お前、俺になんかやらせるんじゃないのかよ！」

魔王は、もはや本来の目的を忘れ去っている自分を打ち負かした者に「お前ホントなにしに來たんだよ」という脱力感で胸がいっぱいになる。

「……………あー。ゴホン、ボクの願いだね」

魔王的には既に感づいていたことだが、彼女は一つ咳払いをしてたたずまいを正す。

だがあえて言わせてもらおう、もう手遅れだ。

「ボクの願い、ボクの欲するもの……それは、キミの魔物を統べる力。その統率力を使ってボクは国を作ろうと思う——」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3522p/>

勇者と魔王の国作り

2010年12月10日20時19分発行